

クラリッサの凌辱と不在の手紙

久野陽一

サミュエル・リチャードソン(Samuel Richardson)の小説『クラリッサ』(*Clarissa*)において、ロバート・ラヴレイス(Robert Lovelace)によるヒロイン、クラリッサ・ハーロウ(*Clasissa Harlowe*)の凌辱は不在である。すなわち、この事件を語ろうとする数々の手紙は、不在の手紙、あるいは、この小説に開いた裂け目であり、穴である。クラリッサの凌辱は、この小説全体の物語の展開上から、ラヴレイスのクラリッサに対する誘惑行為の最終的局面であり、その後彼女が死へと向かうことを考えると、一つの転換点として重大な事件であるにもかかわらず、それまでこの小説のリアリズムを保証しているかに見えた手紙の言説は、それを表象することに一時的な支障をきたし、その具体的な現実はついに明確に語られることはない。凌辱事件についてのこうした沈黙は、それまで手紙によって作り上げられていた現実の統合性が単なる幻想にすぎず、実際はいくつもの境界で区切られた非連続体であることを露呈させてしまう。その前後にみられる手紙の分量が膨大であるだけに、かえってその欠如は際立っているように思われる。

小説『クラリッサ』のなかに走る亀裂として語りうるこの事件が、言説の形式に引き起こす事態は、また、ただ単にこの小説の内部にだけ留まるものではない。ペンダーとウェルベリーに従うと、古代ギリシア、ローマ時代にまで溯る修辞学の伝統は、近代になると全く消滅したかに見える。しかし、表向きは否定されたかに見える修辞学の役割は、当事者の知らぬところで、言説の深層に一種の修辞性(rhetoricity)として浸透する。そうした近代の言説を特徴づける、反=修辞学的な修辞性の一例として、啓蒙主義の時代になると、中性的な

透明性(neutral transparency)をもつ言説が批評的伝達的手段として用いられることとなる。18世紀英国の小説家たちが拠り所としたのも、こうした透明な言説による伝達というモデルであり、とりわけリチャードソンは、それに加えて、編集上の客観性の枠にはめて登場人物の主体を組み立てたと、彼らは指摘する(Bender and Wellbery 20)。では、それに対して、そうした言説によって支えられた小説の客観性、あるいはリアリズムが、たとえそれが一瞬であれ崩壊するときがあるとしたら。クラリッサの凌辱の周辺で起こる事態は、まさにこうした小説の根底のリアリズムを保証する手紙の客観的な言説に穴を開ける。それは、中性的で透明、客観的であるはずの語りの唯中に、何か全く別のもの、それまでの語りでは捉えられない他者の介入を許す。しかし、それは同時に、再び新たな、もう一つの修辞性によって主体が表象されることを意味する。強いていえば、そこに、次の時代を彩るであろう新たな主体の契機が見られるであろう。こうした意味で、クラリッサの凌辱は、この小説だけではなく、18世紀という時代にとってもまさしく一つの事件なのである。

そこで、ここでの目的は、物語の上でヒロインが凌辱される状況に陥ったとき、詳細はなくとも、当然読者には、その場で公に書くことがためらわれる不徳な行いがあったと、暗黙のうちに了解されるであろうこと、あるいは、それを記述すること自体も、その行為同様好ましからざることとして、事件の明確な描写をあえて省略した、作者リチャードソンの生きた時代の文学の申し合わせ事項と彼の作家としての良識を、あらためて確認することではない。またその点で彼を非難し、その欠落を彼に代わって埋め合わせることもない。むしろここでは、この事件、正確にいうと、この事件についての記述が、この小説の文面において一度ならず生じたこと、もしくは生じ損なったことのほうに注目していきたい。現実には起こった事件は一つだと考えられるのに対して、それを記述しようとする言説が複数存在し、その都度事件は記憶のなかで再体験され、また、その行為自体も、凌辱未遂事件として再び行われる。こうした複数にわたって反復される凌辱とその再体験としての表象行為は、それぞれ、客観的な現実の表象に失敗した結果生じる言説の裂け目や穴を露呈させる。しかしその時、手紙の言説が示す新たな修辞性、そこで表象されるべき現実が欠落し

クラリッサの凌辱と不在の手紙

ているという点で不在の修辞性と呼べるものが、逆説的に垣間見せる凌辱によって傷つけられた主体のイメージ、および、そこから帰結できる手紙というもののもっている性質、特にここでは凌辱をめぐって現れる不在の手紙の意味を以下で考察していくことにしたい。

『クラリッサ』において、凌辱事件に関する言説がなされるとき、そこには常に空白の部分が認められる。まず、そうした不在の手紙の中でも最初に参照されねばならない例が、次に挙げるラヴレイスの手紙である。

Tuesday morn. June 13
AND now, Belford, I can go no farther. The affair is over.
Clarissa lives. And I am

Your humble servant,
R. LOVELACE (883)

このラヴレイスの6月13日の日付をもつ短い唐突な手紙が、レイプ事件が実際に行われたという読みの拠り所であると同時に、その事件が、決して明確には表象されないという主張を可能にもする。つまり、この手紙に至る一連のラヴレイスの報告の続き具合からすると、この手紙で事件の肝腎な内容が知らされねばならない。この手紙こそ、事件の核心に触れるものであるはずである。それにもかかわらず、ここで実際に記されているのは、その終了だけでなく、その内容についての具体的なことは何も分からない。ここに「小説の中心に開いた表象されることのない穴」(Eagleton 61)があり、そのとき「読者は情報の裂け目を経験する」(Castle, *Clarissa's Ciphers* 115)のだが、そうした空白を埋めてくれる材料は、少なくともこれだけの記述のなかに見つけることはできない。そこで、この沈黙に何らかの意味づけや解釈が必要とされることになる(Melville 146-48)。よってこの手紙は、それまで彼によってなされてきた、事件を報告する手紙の言説の客観性が、この手紙が登場した時点で修辞的に敗北に帰したことを意味する。事件の現実は、手紙の外に逃げ去り、今度は読者の側が、どこか別の場所にその不在を埋めるものを探し出さなければならないのである。

しかし、この短い手紙は、凌辱事件について具体的で満足のいく、客観性を伴った詳細は伝えてくれないが、その本文を構成する三つのセンテンスは、それぞれに問題の範疇を規定している。まず“I can go no farther”という言葉は、凌辱の行為が、ラヴレイスのクラリッサに対する誘惑と策略にとっての究極の段階、その結果であることを示す。「これ以上進めない」とは、彼の誘惑と策略は凌辱をもって完了し、彼女に対して「これ以上の必要はない」という意味にとれる。また一方で、この言葉は、書くこと、現実を言語によって報告しようという表象行為が、彼にとって限界に達してしまったことを示す声明文だと解釈することも可能である。その事件の現実を前にして「これ以上進めない」とは、「これ以上それを語ることができない」ということである。どちらの意味にしたがっても、この言葉は、ラヴレイスの行き止まり、停滞した状態を表わす。二つめのセンテンス“The affair is over”が明らかにするのは、その事件がすでに終了してしまったことである。この文は、この手紙が書かれた時点において、その事件の瞬間がすでに過去のものであることを知らせる。この言葉があることによって、事件の現実の瞬間は過去へと押しやられ、以後この事件に関する記述のすべては記憶にもとづいて想起させたものであることになる。また、短い手紙の文面に“Clarissa lives”というセンテンスが滑り込んでいることからすると、どうやら事態は、彼女の生死にかかわるほどの衝撃をもっていたと考えられる。それゆえに、凌辱に際してクラリッサの生を襲った危機の様態を、さらに明らかにしてみる必要がある。

このように、停滞あるいは行き止まり、時あるいは記憶、そしてクラリッサの生という三つの事柄が、ラヴレイスの短い手紙から読み取ることでできる、凌辱事件の問題系である。この事件の瞬間が欠落していることは、いってみれば、「読者に、失われた絵の部分を埋め合わせ、凌辱の場面を再創造することを強いる」(Boone 107)という結果になる。そこで、その事件の現場の具体的な再創造の可能性を検討するために、もう少し詳しくその前後をたどり、散在する断片を拾い上げてみなければならない。そのための資料としてまず読まれるのは、事件の終了を告げる短い手紙に至るまで書き続けられたラヴレイスの手紙である。それが、書かれた日時においても、小説のテキストの上での位置関係

クラリッサの凌辱と不在の手紙

においても、凌辱事件の発生に最も近いところにあるからである。その次に読まれるのは、同じ事件を報告するクラリッサの手紙である。この手紙は先だつラヴレイスの手紙に対して、被害者による事件の真相を告白するものとして位置づけられる。どちらも、事件の現実を手紙の言説の上で再構築すべく意図されたものだといえるが、結局のところ、両者とも、ぎりぎりの線で客観的な現実を表象することには失敗している。しかし、特に後者の場合、そのことが書き手に新たな修辭的立場をもたらすことになることを見逃してはならない。

クラリッサが事件の前日、6月12日の午後、一度逃亡したハムステッドから策略的にシンクレア夫人(Mrs Sinclair)の売春宿に連れ戻され、凌辱に至るまでのあいだ、その展開に平行してラヴレイスによる報告がジョン・ベルフォード(John Belford)に対してなされる。事件の直前まで書き続けられる、そうした一連の書簡の示す特徴は、不思議なことに彼の策略の順調な進行ではなく、その一時的中断あるいは停滞である。その日の夕方になるとクラリッサは頭痛を訴える。その原因は、ラヴレイスが彼女に何らかの薬物を飲ませたことにもあるのだが、ここでの文面にそのことは明示されていない。そして、とにかくまたハムステッドに戻りたいとあまりに取り乱す彼女の様子に、彼のほうが逆に狼狽してしまうのである。

I was quite astonished — All my purposes suspended for a moments, I knew neither what to say, nor what to do. But, recollecting myself, am I *again*, thought I, in a way to be overcome and made a fool of! — If I now recede, I am gone for ever. (880-81)

このように、クラリッサの混乱とラヴレイスの停止、停滞、あるいは宙吊りになった状態、ここで文字通り“suspend”という語で表されている状態が、彼の計画の上に影を落とすことになる。そこにさらなる緊張を加えるのが、シンクレア夫人の登場である。彼女は、自分の宿を嫌い、そこからの速やかな脱出を懇願するクラリッサに対して怒り狂う。そのとき興味深いのは、クラリッサが、停滞した状態で狼狽するラヴレイスより、激怒するシンクレア夫人の姿から感じられる“masculine air, and fierce look” (822)の方に恐怖していることであ

る。¹そして、深夜一時頃になり、何とかシンクレア夫人の怒りも静まり、いよいよ事件が提示される場面になって、ラウレイスの報告は行き止まってしまう。この手紙は次のように結ばれる。

And thus, between terror, and the late hour, and what followed, she was diverted from the thoughts of getting out of the house to Mrs Leeson's, or anywhere else. (883)

こうしてこの手紙は終わり、次に現れるのは先に挙げた短い事件の終了を告げる手紙である。ここでクラリッサを脱出どころではなくしてしまった原因に関して、三つのポイント、「恐怖」、「遅い時刻」、そして「続いて起こったこと」(what followed)が指摘できる。換言すれば、激しい感情、時、そして現実がここで問題となるのである。しかし、少なくとも現実に起こった出来事については、ここで語られることはない。また、そもそもこの記述が書かれたのは正確にいつなのか、すでに事件が起きた後なのか、それともその直前なのか、決定するのは困難である。具体的な現実の瞬間は、この記述とこれに続く短い手紙の間の境界にある空白の部分へと消え去ってしまう。その短い手紙が知らせてくれる三つの問題系に呼応して、この記述が語っているのは、ただ事件の終了と表象の行き止まりでしかない。その時点では、事件はすでに過去に押しやられ、それを語る義務も放棄されている。恐らく注目されるべきは、三つめの要素、彼女の生に関連するものであろう。すなわち、「遅い時刻」の闇の中で彼女を襲った「恐怖」である。しかし、その生死にかかわるほどの衝撃の有様についても、この手紙は黙して語らない。とりあえず「恐怖」という表現を与えられたクラリッサの生の姿も、少なくともこの段階では謎のまま後に残されることになる。こうして、自らの策略の成功を高らかに宣言することも可能であったはずのラウレイスの報告の進行は停滞を余儀無くされてしまった。現実に行われたであろう行為についてはともかく、それを手紙の言説によって報告するという彼の企ては、その最終段階で頓挫してしまったことになるのである。

このようなラウレイスによる事件の報告が、その発生に最も近いところで即

クラリッサの凌辱と不在の手紙

時的に、一時的な記憶にもとづいて叙述されたのに対して、クラリッサ本人による事件の報告で強調されるのは、その言説がよりいっそう彼女自身の記憶にもとづいたものであること、記憶によって想起された苦痛の体験であるということである。事件の終了を告げるラウレイスの短い手紙の直後に、作者リチャードソンは編集者として姿を現わし、この事件、この“black transaction” (883)の全体が、7月6日の彼女からアンナ・ハウ(Anna Howe)に宛てた書簡中で詳らかにされることを、わざわざ注釈として挿入している。その手紙で初めてクラリッサは、6月13日未明に至る出来事をアンナに伝える。リチャードソンとしては、注を添えることによって、ラウレイスに対するクラリッサ自身の報告の正統性を主張し、そこを参照することによって、ラウレイスの報告で隠されていた真相がこの小説の読者に明らかになるであろうことを示唆し、形式的に編集上の客観性を成立させようというのである。²

しかし、そうして作者によって権威を与えられた報告も、ラウレイスによるものと同様、必ずしも事件の現実が生起した瞬間の空白を満足のいく形で埋め合わせてくれているわけではない。ただ、彼女の生がその当初から過敏に活動し始めることは、すぐに察知されよう。彼女は、凌辱に至る体験を次のように語り始める。

I will now, as *briefly* as the subject will permit, enter into the darker part of my sad story: and yet I must be somewhat circumstantial, that you may not think me capable of *reserve* or *palliation*. The *latter* I am not conscious that I need. I should be utterly inexcusable, were I guilty of the *former* to you. And yet, if you knew how my heart sinks under the thoughts of a recollection so painful, you would pity me. (997)

事件の起こった6月13日からこの手紙の書かれた7月6日まで、多少間が開いてしまっているため、当時の記憶が曖昧になり、報告も“circumstantial”にならざるをえないことは十分にありうる。しかしより大切なのは、単に時間の経過によって記憶が薄れ、正確さを欠いてしまったことではない。むしろ、その体験を回想するときに伴う精神的苦痛が、彼女がそれを直接に語ることを遅延さ

せたことである。後に再び、“Recollection! Heart-affecting recollection! How it pains me!”(1005)と繰り返し記されるように、事件の体験が彼女の精神にかなりの傷を残しており、それを回想することに常に苦痛が伴わねばならないことが、ここから読み取れる。さらに、ここで“sinks under the thoughts of”とある様に、この記憶の働きに方向を与えるなら、それは明らかに下方への運動である。そして、そのように下方へ沈み込んで行ったところに、彼女の生の深淵が苦痛を伴った体験として見られるであろうことが、このことから予測される。

また、彼女は、その日ラヴレイスに何らかの薬物を飲まされ、その結果事件が起こったときの詳細な記憶がないということも考えられる。事件後の彼の手紙に、“Do not physicians prescribe opiates in acute cases ... ?” (897)とあることからすると、その薬物は阿片であったと推定される。その投与が彼女のそれまでの頭痛を軽減するどころか、悪化させたことについて、彼自身は“the fault of the dose, than the design of the giver”(897)と弁解するが、そもそも彼女が売春宿に連れ戻される頃から訴えていた頭痛も、彼がひそかに売春婦たちを使って与えた阿片が原因であった可能性もあるのだ。しかし、彼女自身による報告を読んでみると、ラヴレイスによる薬の投与がどの時点で行われたのか、その記述は“circumstantial”で明確ではない。少なくともいえることは、彼女が売春宿に連れ戻され暴行を受けるまでの間に、まず水、紅茶を二杯、そしてビールと三回飲物を飲まされる。これらのどれか、恐らくそれぞれに少量ずつ、薬が盛られていたと思われる。たとえば、紅茶を飲まれたとき、彼女はその味に異常を感じたことを想起する。

I thought, *transiently*, that the tea, the last dish particularly, had an odd taste. They, on my palating it, observed that the milk was *London milk*; far short in goodness of what they were accustomed to from their own dairies.

I have no doubt that my two dishes, and perhaps my hartshorn, were prepared for me; in which case it was more proper for their purpose that *they* should help me than that I should help *myself*. Ill before, I found myself still more and more disordered in my head; a heavy torpid pain increasing fast upon me. But I imputed it to my terror. (1008-09)

クラリッサの凌辱と不在の手紙

この引用中、前半で、そのときの記憶にもとづき、飲まされた紅茶に彼女が感じた違和感とそれについて与えた側の売春婦たちがした口実が思い出されている。続く段落で、それについて、この手紙を書いている時点での解釈が加えられる。しかし、最後の部分にあるように、それらの飲物を飲まされるたびに、彼女の意識はどんどん混乱を増し、頭痛は悪化する。同時に、彼女がその原因を帰してしまったほどに、その頃までには恐怖も大きなものとして彼女に迫ってきていたのである。

そして、さらに彼女の意識が混沌とし、麻痺して無感覚な状態に陥ったとき、事件の最終的な局面が迎えられる。

Let me cut short the rest. I grew worse and worse in my head; now stupid, now raving, now senseless. The vilest of vile woman was brought to frighten me. Never was there so horrible a creature as she appeared to me at the time.

I remember, I pleaded for mercy — I remember that I said *I would be his — indeed I would be his* — to obtain his mercy — But no mercy found I! — My strength, my intellects, failed me! — And then such scenes followed — Oh my dear, such dreadful scenes! — fits upon fits (faintly indeed, and imperfectly remembered) procuring me no compassion — but death was withheld from me. That would have been too great a mercy! (1011)

ここで描かれているのが、以前ラヴレイスが「恐怖」と読んでいたものの想起されたイメージである。“such dreadful scene followed”という言葉が、ラヴレイスの報告の最後の部分にあった“what followed”に対応する。それに続いて語られるべき事件の現実の具体的な記述は、ここでも不在のままである。小説のこの引用の直後には文字通りの空白部分が挿入され、手紙の言説が再開されるとき語られるのは、ただ“THUS was I tricked and deluded back by blacker hearts of my own sex” (1011)と、ラヴレイスの指示によってシンクレア夫人と売春婦たちの手で連れ戻された結果起こった、一連の事件の終了である。さらに“I will say no more on a subject so shocking”(1011)と、その事件について、それ以上語ることは放棄される。ここでもまた“I can go no farther”であ

り、“The affair is over”というわけである。

しかし、語られないことが、必ずしも、彼女の「意識の喪失と存在の消滅」(Preston 48)を意味しているわけではない。なぜなら、クラリッサの生については、これまで見られなかった明確なイメージがここから得られるからである。どうやら「死は免れた」と語られてはいるが、文中で何度か繰り返して用いられる“remember”という語とともに回想されるのは、彼女の生がそのとき体験した危機である。意識が薄かったため、不完全な記憶にもとづいていることを差し引いても、「発作につぐ発作」を彼女に引き起こした、この「恐ろしい場面」の恐怖と苦痛は、いくつものダッシュで区切られることによって断片化され、混乱した文体によって十分に表現されている。³ ラヴレイスの報告において宙ぶりにされたまま止まってしまった空白の裂れ目から、クラリッサの生は、恐怖に彩られた事件の瞬間に体験したと思われる混沌のイメージとして姿を現すのである。それ故に、ここで彼女の意識が全く喪失してしまっていたとしても、それは、ただそれまでのものとは違った書き手としての意識を、彼女に付与するためにやむを得なかったといえる。また、ここで彼女の存在が消滅したとしても、それは、ただそれまでの客観的な手紙の言説を生み出す、事件の報告者としての存在が、もはや彼女にとって必要ではなくなったということを示しているにすぎない。以後、彼女は、語り得ないことを語る存在として、新たな意識をもった手紙の書き手として生まれ変わるのである。

こうしたことから、この記述において、クラリッサはラヴレイスの慈悲を得るために“*I would be his*”と自分が口にしたことを回想しているが、彼女がただ貞操を奪われ彼のものになってしまったと、彼に身をゆだねてしまったと、単純に考えるわけにはいかない。クラリッサの凌辱は、“what followed”と“*I can go no farther*”の間に挟まれたエクリチュールの空白の部分で行われた「贈与の一撃」(*le coup de don*)である。そこでは、「与えること」と「奪うこと」、「所有すること」と「所有されること」の対立は無に帰され、弁証法だけではなく、存在論的決定性も回避される(Derrida, *Spurs* 109-11)。クラリッサが薬物の影響と事件のショックのため狂気の状態で過ごした数日間に書かれた10枚の紙片は、ラヴレイスによってまさに所有され、彼の書簡の中に引用される。

クラリッサの凌辱と不在の手紙

しかし、それらの紙片は、彼女がラヴレイスに自らを与えることによって、逆に彼から奪い取ったものを教えてくれるのである。

かつて統一した自己を提示したいという願望をもっていたクラリッサは、それらの紙片において「修辭的に変幻自在」になり、そこで初めて彼女はフィクションと詩を書く(Kahn 147)。たとえば第三の紙片で、彼女は凌辱事件を反復する形で寓話を創作する。要約すると、その物語は次のようなものである。ある女性が猛獣の子どもを贈物にもらい、彼女は危険も恐れず自分の手で養育した。成長すると、その猛獣の子は彼女に大変なつくようになった。しかし、結局のところ最後には、動物本来の性質を取り戻したその獣に、彼女は襲われてしまう。この寓話を解釈するのは、さほど難しくはない。その女性がクラリッサを指し、彼女に贈られた獣の子がラヴレイスを指すこと、その獣の襲撃がラヴレイスによる凌辱行為を意味することは、容易に理解できる。この寓話の最後の一節は以下のように語られる。

But mind what followed. At last, somehow, neglecting to satisfy its hungry maw, or having otherwise disobliged it on some occasion, it resumed its nature; and on a sudden fell upon her, and tore her in pieces — And who was most to blame, I pray? The brute, or the lady? The lady, surely! — For what *she* did, was *out* of nature, *out* of character at least: what *it* did, was *in* its own nature.(891)

ここでも再び現れた“what followed”という言葉に続く部分に、“tore her in pieces”とある。これは、“*Torn in two pieces*”(890)とされる第一紙片や、“*Scratched through, and thrown under the table*”(890)とされる第二紙片などとともに、10枚の紙片全体の提示するイメージを代表する。そして、この断片に引き裂かれた女性というイメージは、彼女が後の報告で描き出す、事件の空白における恐怖の体験とぴったり一致する。しかし、さらに重要なことは、この寓話の中で、ラヴレイスにあたる獣の子が、もともとクラリッサにあたる女性に贈与されたものであったという点である。つまり、この寓話において、現実の「与えること」と「奪うこと」、「所有すること」と「所有されること」の

関係が逆転しているのである。しかも、この寓話を含む全体の紙片は、ラヴレイスに所有されているので、ここで関係は二重に反転していることになる。

他方、ラヴレイスが、クラリッサのように凌辱を捉えることができなかったというのは正確ではない。彼も、7月20日に見た夢において、凌辱の瞬間を、彼女と同じように混乱した状態として描き出すことに何とか成功する。ほぼ凌辱への関係をなぞるように進行するその夢の物語は、二つの変身によって特徴づけられる。一度は、彼に襲われる危険を感じて逃亡したクラリッサをかくまってくれた老婦人から、シンクレア夫人の友人のH夫人(Mother H)への、その次は、夜の闇の中でクラリッサと一緒にベッドに入っていたはずのH夫人から、若い男性、すなわちラヴレイスへの変身である。以下に引用する二度めの変身の直後が、この夢の中で“what followed”に続いて起こったことに対応する場面である。

A strange promiscuous huddle of adventures followed; scenes perpetually, shifting; now nothing heard from the lady, but sighs, groans, exclamations, faintings, dyings — from the gentleman, but vows, promises, protections, disclaimers of purposes pursued; and all the gentle and ungentle pressures of the lover's warfare. (922)

このように、ラヴレイス側も、かつての報告において空白だったところに、クラリッサと同様の一つのイメージを与えることにとりあえず成功したといえよう。しかし、この夢は、彼の願望を実現に向けて動き出せることはなく、逆に、両者の「役割の交代の開始」(Castle, “Lovelace's Dream” 34)を告げるものであったのである。⁴ この夢は、皮肉にも彼を小説の物語の展開から乖離させる。今や、彼女は彼の手を逃れようとしており、それまで策略によって話の展開を左右させてきた彼は、それを阻止することもできない。

ここで、凌辱事件後のクラリッサの新たな修辭的立場が明らかになるであろう。彼女は、元来、中性的で透明な客観性をもつ手紙の言説をモデルとして造形された人物、現実の事件を報告しようとする書き手、作者というより報告者の立場であった。それに対して、事件を経験した後の彼女が位置するのは、心

クラリッサの凌辱と不在の手紙

に深く刻まれてはいても、それを明確には語り得ない傷を負った主体をもつ、作者の立場である。以後、彼女にとって、透明で客観的な事件の報告は不可能であり、彼女の書くものにはすべて、彼女の被った傷痕が刻印されることになる。こうした傷痕は、小説の上で、常に裂け目、あるいは空白の部分として表象されねばならない。あるいは、たとえそれが手紙の言説の上に何とか定着してきたとしても、それは、それまでの明瞭さや明確さを全くもたぬ、混乱や混沌のイメージとして現れ、そこで語られるべき物語の客観性あるいはリアリズムを破綻させるだけである。そして、これらの亀裂や空白、あるいは混乱や亀裂の底から幽かに姿を見せるのが、傷痕を刻印された主体と呼んで差し支えない、彼女の虐げられ、危機に瀕した生の深淵である。このような、それまで可能であった方法によっては明確に語り得ぬものを抱えて、なおそれを語らねばならない事態が、彼女に新たな修辞性をもたらす。今や彼女は、語り得ぬものがあるがために語る。これが、彼女がラヴレイスに貞操を奪われることによって、逆に手に入れた立場であり、これによって、彼女の危機に瀕した生は、今度は新たな作者たるべき主体をもって、その受難の物語を語り始めることが可能となるのである。よって、クラリッサの凌辱は、小説の展開において、彼女を死に至らしめるものではあるが、しかし、いわゆる「作者の死」をもたらすものではないさきかもない。むしろそれは、傷つけられたがゆえに主体を開示させる作者の誕生を積極的に促すものなのである。

ここで、彼女が傷つけられることによって語りえた物語とは、一体どのようなものなのであろうか。そこで、強調しておかなければならないのは、上にみたクラリッサとラヴレイスの言説において、この小説の手紙は精神分析の言説に限りなく接近したと考えられることである。すでにふれておいたように、クラリッサが凌辱されたと推測されるのは、ラヴレイスの策略によって薬を盛られ、意識が麻痺して無感覚な状態のときであり、彼女がその直後に書いた十枚の紙片も、この薬物の影響下において書かれたものであった。一方、ラヴレイスの場合は、まさしく彼の見た夢の物語を語っていたのである。そして、ラヴォアジエ(A. L. Lavoisier)が、1784年のフランスで催眠(hypnosis; “animal magnetism”; mesmerism)の実験を行い、啓蒙主義の全盛期にあって、催眠状態

の意識のなかに新たな科学的理性を促え、後のフロイト(S. Freud)に至る精神分析学への道を開いたのは、『クラリッサ』が出版されてから、まだ半世紀とたっていない時代であった(Chertok and Stengers 1-66 参照)。要するに、明らかに通常の理性の状態を失ったところで書かれたクラリッサとラヴレイスの手紙は、精神分析の言説の誕生と、ほぼ同時代の出来事なのであり、彼らの手紙をそのまま精神分析の言語で語ることも、あながち的外れでもないということである。よって、凌辱以後の彼女の語りうる物語に常に傷痕が刻印されていることと、それが精神分析的寓話であると考えたこととは矛盾しない。

また、そうした場合、ラヴレイスではなくクラリッサの傷つけられた主体について特に問題となるのは、彼女が奪われることによって手に入れたもの、物語を創造する能力が、精神分析の言語を使って象徴的にファルスとしての「ペン」であるともいえることである。それは、本来手紙を書く女性であった彼女が位置付けられていた場所でもあるといえる(Cummings 97-98)。それを最も典型的に示している例が、ラヴレイスが“farce”(947)と呼ぶ、凌辱事件から十日ほどして起こった再度の暴行の危機、凌辱未遂事件である。そのとき、彼女が身を守るためにした、自分の胸にペン・ナイフを突き立てるという行為は、彼女自身がそれを意識したことの現れでもある。そこで彼女が口にする、“The LAW shall be all my resourse”(950)という言葉が端的に示してくれるように、それは、彼女に社会の制度も取り込むことをも可能にする。さらに、死へと向かう彼女の準備作業が示すように、彼女の主体は、自らの生以外のところに解放されていくのである。

ただし、クラリッサがここで「法」といっても、たとえば裁判所にラヴレイスを告訴したとしても、彼女が勝訴することは困難であったと考えられる。18世紀後半から19世紀前半のイギリスにおけるレイプ事件を調べたクラークによると、この時代、そうした事件が裁判に取り上げられ難かった、さらに、加害者が有罪になることはもっと稀であったということである。当時のイギリスでは、女性の“chastity”は、“treasure”や“jewel”などといった、経済的用語で言表されるような、男性の財産あるいは所有物でしかなかった(Clark 22)。一方、男性の側では、その抑え難い熱情がレイプを引き起こすと信じられており、それ

クラリッサの凌辱と不在の手紙

が男性の“nature”であるとされた(34)。それゆえに、実際に事件が発生し、裁判に訴えようとした場合、逆説的な状況に陥る。加害者は、価値ある財産である女性の美德を襲ったのであるから、罰せられるに値する。しかし、被害者の女性は美德を失ったので、その証言の信用までも失ってしまう。そのため、裁判官は、すでに“unchaste”であり、それゆえに無価値な女性の告発にもとづいて、加害者の男性を処刑することをためらったとされる(47)。その結果、男たちはレイプを通じて、女たちを恐れさせる権力を振うことによって、女性に対する暴力の現実を隠匿しようとし、女性から彼女自身のレイプ体験を公然と語る能力を奪い、最終的に沈黙へと追いやると、クラークを結論づける(129)。これと全く同じ沈黙に、クラリッサもまた、自らの凌辱体験を語る上で追いやられた。⁵

しかし、クラリッサが自分の胸に突き立てたペン・ナイフは、彼女がこれとは違った法に訴えようとしていることを、象徴的に示している。彼女が手にしているペンは、父権的社会制度に対して、また、そのなかであくまでも家の財産として扱われてきたという意味で、そうした制度に隔々まで浸された自分の身体に対して、突き立てられたものである。彼女は、そのペンで身体を突き、穴を開けることによって語る。彼女が凌辱の体験を語る時、常にそれに伴って現れる沈黙、空白の部分がそれである。そして、そうして開かれた穴、裂け目の向こうに姿を見せる彼女の生の深淵、彼女の主体の混乱と混沌は、周囲を取り囲む制度の秩序を揺り動かすだけの力を発揮することになろう。明確には語り得ない傷痕をもつ主体をもって語らなければならないという、彼女が新たに位置づけられた修辭的立場は、こうして、透明で客観的な言説の制度だけではなく、凌辱事件において女性に沈黙を強いる社会的制度に対しても、他者となりうる存在として彼女を規定することになるのである。

最後に、こうしたクラリッサの凌辱をめぐって現れる不在の手紙と、それらに見出せる彼女の主体の混沌のイメージが何を意味するのか、それを踏まえて、そもそもクラリッサの凌辱とは何であったのか、ということについて考えなければならない。その場合是非とも参照しなければならないのは、ここでも精神分析の言説について、とりわけ E. A. ポー(Edgar Allen Poe)の短編『盗まれた

手紙』(“The Purloined Letter”)についてなされたいくつかの論考である。というのは、クラリッサの凌辱における手紙がそうであったように、このポーの物語に登場する手紙が、まさに手紙そのものの内容の不在(Johnson 113)に特徴づけられるからであり、手紙というものの性質について考えさせてくれるからである。そこで、簡単に『盗まれた手紙』をめぐる論を追ってみたい。

まず、この短編は、J. ラカンによって、そのまま精神分析における問題とされる。彼にとって、手紙とはシニフィアンであり、本来的に不在のシンボルである(Lacan 54)。それによって彼は、主体を構成する象徴的秩序の真理を説明しようとする(40)。しかし、このラカンのいう真理は、J. デリダが批判的に明らかにしたように、「去勢としての女性」(Derrida, *The Post Card* 439)である。そして「女性と真理の結びつきが、この[ラカンの]読解の究極のシニフィエである」(441)とデリダはラカンの主張を逆転させる。しかし、両者の分析にさらなる分析を加えた B. ジョンソンによると、どちらの分析も空間的理解のモデルを打ち破るためになされているという点で共通する(Johnson 129)。彼女が両者の論を総括していうには、内容すなわちシニフィエをもたない欠如としての手紙、シニフィアンであり、去勢である手紙は、物語の中の「修辭的な襞」(a rhetorical fold)(139)、あるいは、逆説的な「結ばれ」(knots)(141)であるということである。そして、分析行為とは、「結ばれを作る行為を反復することによって、構造における結ばれを解く行為」(142)である。それゆえに、精神分析もこうした分析の一つの様式として、常に反復を繰り返す。このことは、ラカンが「盗まれた手紙」あるいは「未処理の(取りにこない)手紙」(letter in sufferance; *lettre en souffrance*)の動きに、フロイトの反復強迫の議論につながる「反復の自動運動」(Lacan 59-60)を見出したこと、さらに、デリダが「精神分析は常にそれ自体を見出す、あるいは見出される」(Derrida, *The Post Card* 413)と彼のラカン読解の最初で述べたこととも符合する。すなわち、精神分析とは「精神分析それ自体が追い求める原場面(the primal scene)」のことであり、「解釈という外傷(trauma)を反復するもの」(Johnson 142)なのである。⁶ 以上のような『盗まれた手紙』論から導き出されることは、これまで『クラリッサ』における凌辱とそれをめぐる手紙について考えてきたことから、掛け離れてはいな

クラリッサの凌辱と不在の手紙

い。実際、クラリッサの凌辱をめぐる手紙は、不在の部分をもつだけでなく、明らかに精神分析的言説に近づいているからであり、また、それが反復して現れるからである。

クラリッサの凌辱とは、『クラリッサ』という小説の原場面、しかも手紙の言説の表面から常に失われた原場面である。報告されるに当たって、常にそれは、すでに終了してしまったもの、あるいは不在として語られねばならないのであり、苦痛、精神的外傷を反復するものとして繰り返し立ち戻られる。それはまた、去勢の場でもある。それゆえに、事件の後でクラリッサがファルスとしての「ペン」を手にいれたのとは逆に、ラヴレイスのほうは去勢されてしまったということになる。この去勢、あるいは去勢としての女性性に対する恐怖が、事件を報告しようとする上で、彼が示した停滞、行きづまりを引き起こすのである。そして、反復される複数の不在の手紙は、この小説の修辭的な「結ばれ」を形作っている。かつて編集者としてのリチャードソンが、読者の解釈を導こうとしたときに使った“black transaction”という言葉は、むしろ、クラリッサが文字通りの不在を垣間見せる瞬間に対して使われるべきであった。それが語り得ないのは、裂け目や欠如をもってしか語り得ない彼女の新たな修辭性がそれを許さないからだといってよかろう。クラリッサの凌辱に関する言説の裂け目が現出させる、混乱や混沌といった錯綜したイメージが記録するのは、どこまでも外面でしかない透明な言説で手紙を書いてきたクラリッサが、「修辭的な襲」において、不在の手紙として主体を形成しようとする瞬間に、それを語ることの逆説的な不可能性なのである。

※本稿は、日本文学会中部地方支部第43回大会（1991年10月5日三重大学人文学部）において行われた口頭発表に、大幅に加筆・修正を加えたものである。

注

1 こうした点から強調されるべきなのは、シンクレア夫人の男性性である。よっ

て、たとえば Wilt が示すように、凌辱をクラリッサ対シンクレア夫人と売春婦たちという女性同志の対立と考えることが可能だとしても、やはりクラリッサの女性性とシンクレア夫人の男性性という男女のジェンダー間の対立があることは否定できない。

- 2 『クラリッサ』における作者の介在およびそれが作品の解釈に与える問題に関しては、Warner 123-218, Gopnik 107-16を参照。
- 3 リチャードソンが女性性や美德の描写に使う語彙、たとえば“tenderness”, “sensitivity”, “delicacy”などに加えて“disorder”という言葉は、一方で18世紀におけるヒステリーの描写に特徴的な語彙でもある(Mullan 218)。
- 4 ただし、18世紀には、夢に対して無意識の願望充足という考え方はされなかったので、キャッスルなどの、フロイト流解釈では不都合だという批判もあることを付記しておく(Aikins 参照)。
- 5 クラークほどフェミニズムに影響された問題意識と主張がないが、同時代のレイブ事件と裁判に関して歴史的に扱ったものとして、Beattie 124-32を参照。
- 6 ここでは特に不在論であるという理由で以上の三人の論を見たが、彼ら以外に『盗まれた手紙』と精神分析の問題を扱った数々の論考を集めたものとして、Muller and Richardson を参照。

引用文献

- Aikins, Janet E. “Accounting for Dreams in *Clarissa*: The Clash of Probabilities.” *Psychology and Literature in Eighteenth Century*. Ed. Christopher Fox. New York: AMS P, 1987. 167-97.
- Beattie, J. M. *Crime and the Courts in England 1660-1800*. Princeton: Princeton UP, 1986.
- Bender, John, and David E. Wellbery. “Rhetoricality: On the Modernist Return of Rhetoric.” *The End of Rhetoric: History, Theory Practice*. Eds. John Bender and David E. Wellbery. Stanford, Cal.: Stanford UP, 1990. 3-39.
- Boone, Joseph Allen. *Tradition Counter Tradition: Love and the Form of Fiction*.

- Chicago: U of Chicago P. 1987.
- Castle, Terry. *Clarissa's Ciphers: Meaning and Disruption in Richardson's "Clarissa"*. Ithaca, N. Y.: Cornell UP, 1982.
- . "Lovelace's Dream." *Studies in Eighteenth-Century Culture*. Vol. 13. Ed. O. M. Brack, Jr. Madison: U of Wisconsin P. 1984. 29-42.
- Chertok, Léon, and Isabelle Stengers. *A Critique of Psychoanalytic Reason: Hypnosis as a Scientific Problem from Lavoisier to Lacan*. Trans. Martha Noel Evans. Stanford, Cal.: Stanford UP, 1992.
- Clark, Anna. *Women's Silence, Men's Violence: Sexual Assault in England 1770-1845*. London: Pandora P, 1987.
- Cummings, Katherine. *Telling Tales: The Hysteric's Seduction in Fiction and Theory*. Stanford, Cal.: Stanford UP, 1991.
- Derrida, Jacques. *Spurs: Nietzsche's Styles*. Trans. Barbara Harlow. Chicago: U of Chicago P, 1979.
- . *The Post Card: From Socrates to Freud and Beyond*. Trans. Alan Bass. Chicago: Chicago UP, 1987.
- Eagleton, Terry. *The Rape of Clarissa: Writing, Sexuality and Class Struggle in Samuel Richardson*. Oxford: Basil Blakwell, 1982.
- Gopnik, Irwin. *A Theory of Style and Richardson's "Clarissa"*. The Hague: Mouton, 1970.
- Johnson, Barbara. *The Critical Difference: Essays in the Contemporary Rhetoric of Reading*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1980.
- Kahn, Madeleine. *Narrative Transvestism: Rhetoric and Gender in the Eighteenth-Century English Novel*. Ithaca, N. Y.: Cornell UP, 1991.
- Lacan, Jacques. "Seminar on 'The Purloined Letter'." Trans. Jeffrey Mehlman. *Yale French Studies* 48 (1972): 39-72.
- Melville, Steven. "Taking Clarissa Literally: The Implication of Reading." *Genre* 21 (1988): 135-56.
- Mullan, John. *Sentiment and Sociability: The Language of Feeling in the Eigh-*

- teenth Century*. Oxford: Clarendon, 1988.
- Muller, John P., and William J. Richardson, eds. *The Purloined Poe: Lacan, Derrida and Psychoanalytic Reading*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1988.
- Preston, John. *The Created Self: The Reader's Role in Eighteenth-Century Fiction*. London: Heinemann, 1970.
- Richardson, Samuel. *Clarissa*. Ed. Angus Ross. Harmondsworth: Penguin, 1985.
- Warner, William Beatty. *Reading "Clarissa": The Struggles of Interpretation*. New Haven: Yale UP, 1979.
- Wilt, Judith. "He Could Go No Farther: A Modest Proposal about Lovelace and Clarissa." *PMLA* 92 (1977): 19-32.

Synopsis

The Rape of Clarissa and the Letters of Absence

By Yoichi Kuno

There open several holes or gaps in the middle of Samuel Richardson's *Clarissa*. All these holes are placed where must be some representations concerning the most crucial event of the novel, that is, the rape of Clarissa. They are discovered both in Clarissa's and Lovelace's letters. First appears Lovelace's brief announcement of the event; but this letter of his only informs the reader about the end of execution of his plot and the boundary of its representation within the epistolary discourse. There is a gap of information between this letter and his preceding report on the advance of his plot. On the other hand, Richardson as an editor authorizes Clarissa's account on the event to fill up this gap. Her letter succeeds in clarifying some aspects of Lovelace's plot, but the essential fact still remains unclear. Thus the very act of rape of Clarissa evades their discursive representation, and, as a result, the realistic construction of the novel is finally damaged at the most decisive point because of these gaps of information.

But the absence of representation compels Clarissa to choose another rhetorical position as a letter writer. Up to that time, her basic rhetoricality, that is a sort of non-rhetoricality as a matter of fact, has been shaped from the model of critical discourse in the age of the Enlightenment: the faith in communication through the neutral transparent discourse and achievement of the realistic objectivity. According to this rhetorical model, she tries to reconstruct the affair of violence within her epistolary discourse. The final absence of representation of its occurrence, therefore, means the defeat of her discursive activity and the loss of her objective rhetoricality. While her former model fails to surmount this difficulty of representation, her new rhetorical position can be formed contrarily by realizing the absence in her discourse. Her account on the rape and ten mad papers written just after the violence, though they cannot fill up the gaps, present the images of Clarissa in a confused state of mind. These images are not objective reports about the event at all, but they disclose the figure of her subjectivity which cannot be seen in the neutral discourse. Her new rhetorical position deeply depends on this subjectivity, which leaks through the holes of epistolary discourse, and which makes her possible to speak of her unspeakable experience, of her traumatic danger of life, the rape. In other words, the rape is the primal scene where she repeatedly returns, and the holes or gaps in the discourse initiate her into the new and completely different rhetoricality for the representation of her traumatic subjectivity.